小倉山の百人一首を京極の黄門撰ひ
おかせ給ひしより後絵をそへなむ世
にもてあそふ画農かたはらにも中将むし
よりかの哥人を絵かきその詠歌に
かれ載せその色紙にちらしかきてあまた
ねく世におこなはるゝはあれと此うた
ことはりそのほかの集座席ことに訛
哥の文字もおほくかはれり是をなけかし
ずむかしの手をもつて此一巻を書の一字後の
世にはゝるゝことも無なかるらし

天智天皇

秋の田乃かりほの
庵の苫をあらみ
わかころも手は
露にぬれつゝ

持統天皇

春過て夏来にけらし
白妙の
ころも
ほすてふ
あまのかく山

柿本人丸
山邊赤人

猿丸大夫
奥山に
もみぢ踏分
鳴鹿の
こゑきく
時ぞ
秋はかなしき
中納言家持
鵲の
わたせる
はしに
をく霜の
しろきを
みれば
夜ぞ更にける

安倍仲麿
天の原ふりさけ
見れば春日なる
みかさの山に
出し月かも
喜撰法師
わが庵は
都のたつみ
しかぞすむ
世をうぢ山と
人はいふなり

小野小町
花乃色は
うつりに
けりないたづらに
わが身よに経る
詠せし間に
蝉丸
これやこの
ゆくも帰るも
わかれては
しるもしらぬも
あふ坂の関

参議篁

和田の原八十島かけて漕出ぬと人にはつけよ海士のつり舟

僧正遍昭

天津風雲のかよひ地吹とぢよをとめのすがたしばしとゞめん

光孝天皇
君かためはるの
野に出てわか
なつむわか
ころもてに
雪はふりつゝ
中納言行平
立わかれいなはの
山のみねにおふる
まつとしきかは
今かへりこん

在原業平朝臣
ちはやふる神代も
きかす
龍田川
からくれなゐに
水くゝるとは
藤原敏行朝臣
すみの江のきしに
よる浪
よるさへや
夢のかよひ路
人めよくらん

伊勢
難波かた
みしかき
芦のふしのまも
あはて
この世を
すくしてよとや
元良親王
侘ぬれは
今はた同し
難波なる
みをつくしても
あはむとそ思ふ

素性法師
今来むといひしはかりに長月の有明の月をまち出つるかな
文屋康秀
吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

大江千里
月見ればちゞにものこそかなしけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど
菅家
此たびはぬさもとりあへず手向山
もみぢのにしき神のまにまに

三條右大臣
名にしおはゞ
逢坂山の
さねかつら
人にしられて
くるよしもかな
貞信公
小倉山
みねのもみち葉
心あらは
いまひとた
ひの
御幸またなん

中納言兼輔
みかの原
わきてなかるゝ
泉河
いつみきとてか
恋しかるらん
源宗于朝臣
山里は冬そ
さひしさ
まさりける
人めも草も
かれぬと思へは

凡河内躬恒
心あてに
おらはや
おらん
初霜の
をきまとはせる
志ら菊の花
壬生忠岑
有明の
つれなく
みえし
わかれより
あかつきはかり
うき物はなし

紀友則
久かたのひかりのとけき
春の日に
しつこゝろなく
花のちるらん
藤原興風
誰をかもしる
人にせん
高砂の
松もむかしの
友ならなくに

紀貫之
人はいさ心も
しらす故郷を
はなそむかし乃
香ににほひける
清原深養父
夏の夜は
またよひなから
明ぬるを
雲のいつこに
月やとるらん

文屋朝康
志ら露尓
風のふき
しく秋の野は
つらぬきとめぬ
玉そちりける
右近
忘らるゝ
身をは
思はす誓て
し
人乃命の
おしくもあるかな

参議等
浅茅生のをのゝ
志の原忍ふれと
あまりて
なとか
人の恋しき
平兼盛
忍ふれと色に
出にけり
我恋ハ
ものや思ふと
人のとふまて

壬生忠見
恋すてふ
わか名は
またき立に
けり
人志れすこそ
思ひそめしか
清原元輔
契りきな
かたみに袖を
しほりつゝ
すゑの松山
浪こさしとは

中納言敦忠
あひみての
後の心に
くらふれは
むかしは物を
思はさりけり
中納言朝忠
あふ事の
たえてし
なくは中々に
人をも身をも
うらみさらまし

謙徳公
あはれとも
いふへき
人は
おもほえて
身のいたつらに
なりぬへきかな
曾祢好忠
由良のとを
わたる
舟人
かちをたえ
行衛もしらぬ
恋の道かな

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士の
たく火の
夜はもえて
ひるは
きえつゝ物をこそ
思へ

藤原義孝

君かためをしから
さりし命さへ
なかく
もかなと
思ひけるかな

右大将道綱母
なけきつゝ
ひとり
ぬる夜の
明くるまは
いかに久しき
物とかはしる
儀同三司母
忘れしの
ゆくすゑまては
かたけれは
けふを限
りの
命ともかな

大納言公任
瀧乃音はたえて久しく成ぬれと名こそ流れてなほきこえけれ
和泉式部
あらさらむこの世乃外乃思ひ出にいまひとたひのあふこともかな

紫式部
めぐりあひて
みしやそれとも
わかぬまに
雲がくれにし
夜半の月かな
大貳三位
有馬山
ゐなのさゝ原
風ふけば
いでそよ
人をわすれやは
する

赤染衛門

やすらはて
袮なましものを
さ夜ふけて
かたふくまての
月を見しかな

小式部内侍

大江山
いくのゝ道乃
とをけれは
またふみも
みす
あまのはしたて

左京大夫道雅
今はたゞ思ひ
絶なむと
ばかりを
人づてならで
いふよしもがな
権中納言定頼
朝ぼらけ
うぢの川霧
たえ〴〵に
あらはれわたる
瀬々の網代木

相模
うらみ侘ほさぬ
袖たにある物を
恋にくちなん
名こそおしけれ
前大僧正行尊
もろともに哀と
おもへ
山さくら
花より
ほかに
しる人もなし

周防内侍
春乃夜乃
夢はかりなる
手枕に
かひなく
たゝん
名こそおしけれ
三條院
心にもあらて
うき世に
なからへは
恋しかるへき
夜半の月哉

能因法師
あらし吹
みむろの
山乃もみぢ葉
龍田乃川の
錦なりけり
良暹法師
さびしさに
宿を立出て
詠れば
いつくも
おなじ
秋乃夕くれ

前中納言匡房
たかさごの尾の上の
桜さきに
けり
と山のかすみ
たゝずもあらなん
源俊頼朝臣
うかりける人を
はつせの
山おろし
はげしかれとは
いのらぬものを

藤原基俊
契りをきし
させもか露を
命にて
あはれことしの
秋もいぬめり
法性寺入道前関白太政大臣
和田の原
こき出て
見れは
雲井に
まかふ
久かたの
沖津白浪

崇徳院
瀬をはやミ
岩にせかるゝ
瀧川の
われても
末に
あはんとそ思ふ
源兼昌
あはち嶋
かよふ千鳥の
なく声に
いく夜
ねさめぬ
須磨の関守

左京大夫顕輔

秋風にたなひく
雲のたえまより
もれ
いつる月の
影のさやけさ

待賢門院堀河

なかゝらむ
心も
しらす黒かみの
みたれてけさは
物をこそ思へ

後徳大寺左大臣

郭公鳴
つる方を
なかむれハ
たゝありあけの
月そのこれる

道因法師

思ひ侘さても
命はあるものを
うきに
たへぬハ
涙なりけり

皇太后宮大夫俊成
世中よ道こそなけれ
思入山の奥にも
鹿ぞ鳴なる
藤原清輔朝臣
なからへばまたこの比や
しのばれん
うしと見し世ぞ
今は恋しき

俊恵法師

夜もすから
ものおもふ
ころハ明やらて
閨のひま
さへ
つれなかりけり

西行法師

なけとて
月やハ物を
思ハする
かこち
かほなる
我涙かな

寂蓮法師

むら雨乃露も
またひぬ
槙の葉に
霧たち
のぼる
秋乃ゆふくれ

皇嘉門院別当

難波江の
あしのかりねの
一夜ゆへ
みをつくしてや
恋わたるべき

式子内親王
玉の緒よたえなはたえね長らへは忍ふる事のよはりもそする
殷富門院大輔
見せはやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす

後京極摂政前太政大臣
きり〳〵すなくや
霜夜の
さむしろに
ころも
かたしき
独りかも寝ん
二條院讃岐
我袖は
しほひに見
えぬ沖の石の
人こそしらね
かはく
まもなし

鎌倉右大臣

世中は
つねにも
かもな
なきさこく
海士乃をふ
ねの
つなてかなしも

参議雅経

みよし野山の
秋風
小夜更て
ふるさと寒く
衣うつなり

前大僧正慈圓
おほけなく
うき世の民に
おほふかな
わかたつ杣に
墨染の袖
入道前太政大臣
花さそふ嵐の
庭の雪ならて
ふりゆく
ものは
我身なりけり

権中納言定家
来ぬ人を
まつほの浦の
夕なぎに
焼くや
もしほの身も
こがれつゝ
正二位家隆
風そよくならの
小川のゆふくれは
みそ
ぎぞ夏の
しるしなりける

後鳥羽院

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は

順徳院

百敷やふるき軒端のしのぶにもなほあまりあるむかしなりけり

右此一策古本乱雑而有錯謬
所謂襞束之品節座席之混乱
假名使之誤等繁多也今再往改
之以新令板行者也

延寶八庚申年初夏

畫工 菱川氏師宣

通油町 本問屋開板

此百人一首者大田南畝所嘗蔵如其標題
小倉山百人一首延寶刻菱川師宣画十五字
即南畝老筆也庚午春余在東京而得以
比尋常坊本則其訛謬甚少云

明治辛未五月 不空山人枳園書